

感想文

土支田・大泉支部 菊池善次郎

(1)カンファレンス全体の報告と感想

この度、第 21 回国際 HPH カンファレンスに東京保健生協代表団の一人として参加させていただき“地域組合員による健康づくり活動”を世界にアピールし、「青色リボン」の受賞に輝いた事は望外の喜びであり、貴重な体験となりました。ご支援をいただいた皆様に心から感謝申し上げます。

今年 3 月、気軽に応募した“ヘルスチャレンジで健康づくり”が評価されてポスターセッションに参加となりましたが、英語は読めない、書けない、話せない、ましてや時差 7 時間もある遠い国、スウェーデンでありながら、“参加の現実味”が乏しく、全日本民医連の事前資料「参加要領」を十分に読み切れないまま、“自分の任務は日本語で頑張るポスターセッション”、その思いだけで参加した様なものです。

全体会の会場には世界中の加盟国から 820 人(全日本民医連 22 人)とのことでしたが、どこを見ても横断幕やスローガンの看板もなく、演壇にあるのは発言者用の机とマイク、発言の概要を映し出すスクリーンだけで「飾り気」がありません。また発言者も大学教授、博士、政治家、研究者たちで専門分野からの問題提起や研究の到達点と課題、国際的関係の連携方向などであり、全発言内容は民医連から同行した通訳によって日本語を右耳で、左耳は生の英語であっても自分なりにスクリーンと見合わせて納得できる場面もありました。

日本の諸会議は、とかく主題について“賛否”を問われ、激しく対立する場面もありますが、“検討会”は「到達点を学び合い」「問題点を探り合い」「発展の方向を全世界に」……だから会議では“検討会”の名称となっているのだろうと勝手に納得したものです。

また、各分散会で民医連代表は 3 人発言していました。伊藤代表は「昨年の HPH セミナー日本開催の意義と展望」と題して、①千鳥橋病院は見学者対策として「HPH ゾーン」を設置、②東京保健生協は「HPH プロジェクトと組合員による健康づくりの推進」、③秩父生協病院の“燃やせ体脂肪と脳いきいき教室”、④民医連と共同組織の発展方向について元気よく発表していました。別紙で日本語版があり通訳が不在でもばっちり受け止めることが出来ました。

他の会場では千鳥橋病院の船越さん、みさと病院の篠塚さんがそれぞれ英語で発表しました。

夜、ホテル近くを散策しましたが、終業閉店が多い中で「すしバー」、「やきとり」の看板を見つけても店員は日本人ではなさそうなので遠くから見ただけ。また、大きな店に入ってもどこに何があるのか見当が付きません。意外にも“浮浪者”が多いのには驚きでした。ホテルのお店で一杯交わしながらの歓談が何よりの栄養源になりました。

(2)ポスターセッション 日本語で奮闘

全体会は同時通訳付きで自分なりに理解できましたが、分散会は英語発言の中で日本人には別紙(日本語)があつてホッとしました。英語発言が続くとお手上げです。

24 日午後、大泉生協病院からのポスターセッション、①齋藤院長の「高齢者の栄養状態について」、②秋野さん「体力測定で健康づくり」の 2 枚が、他国のポスター約 200 枚の中で廊下や会場に貼り出さ

れ、閲覧者が行き交う中で声が掛かれば英語で説明する方式でした。日本語オンリーの自分は「明日はどうなるのであろう…」と不安でしょうがありませんでした。

25 日朝、ホテルで中野さんの力を頼って「ポスターの縮小版コピー30 枚」印刷して会場入りし、午前中は全体会に参加、午後も分散会に出席しましたが「自分の出番」が気になって早めにポスター前に立ったり、No.314 番を確認し、ポスター下に縮小版の宣伝紙を吊るしたり、声を掛けられたらどう答えるのか考えていたら、予定時間前なのに青色のリボン大小を持った3人連れの外国人が近づいてきて「リボンあなたです。



オメドト」と聞こえた気がしたけど信じられません。間違いでは困るので近くに日本人がいないか見回したがどこにも日本人が見当たりません。そこで日本語で「No.314、OKか」「この写真は私ですが大丈夫ですか」と再確認を求めたら、デッカイ手を出し握手しながら「OK,OK」と大きなリボンをポスターに、小さなリボンは私の胸元につけて、大きな外国人に両肩を抱き寄せられた時はもう感激で頭の中は真っ白、信じられない事態です。

定時前と思い、リボンを両手に持って日本人を探し歩きましたがどこにも日本人が見当たらないので、ポスターの位置に戻り、二つのリボンをポスターに飾り付け、「このリボンを見て下さい。」「この英語を読んで下さい。」「この写真は私です。」「これは支部総会と桜のダンスです。」と一人で日本語を繰り返しているうちに、分散会から駆けつけた通訳や根岸さんを始め皆さんも応援に来てくれました。やっと通訳が入り質問に答える場面となり、気分も落ち着いた頃には日本人の顔も多くなり、「おめでとう」の声も聞こえ、カメラもあちこちから向けられていました。

つい先程まで「どのように手順よく説明できるか」不安でしたが、まるで何事もなくリボンを受け取り、勝手に日本語で声かけしていた自分は何者だろう…とにかく東京保健生協の一団が勢ぞろいしてポスターの前で“パチリ”となりました。皆さんの大きなご支援と熱い思いを受けてポスターセッションに「地域での健康づくり」を世界にアピールできた記念すべき日となりました。

(3) 全日本民医連の仲間との交流と報告

24 日の夜の全日本民医連のお別れ会の場で、「ポスターセッションに初参加でリボンを受賞した地域で活動している菊池です。ヘルスチャレンジを支部で取り組み集約と分析を発表したらリボンが届いた」と発表したら、「組合員の参加があるとは思わなかった」「東京保健は目のつけ所がいいね」「帰国したらインタビュー頼む」の声もありました。

(4) 旅行中のエピソード

①せっかくの海外出張だが日本食が恋しくなるだろうと「醤油のパック」、「ふりかけのり」、「ウメ漬け」など“日本の味”を持ち込みましたが、パンやチーズ類ばかりでは“日本の味”を合わせる相手がなく、そっく

り持ち帰りました。

②現地到着の翌日から腹具合が悪くなり胃腸薬と風邪薬を飲み続け、飲食物は控え目にしながら、会場移動する度に“緊急時に備えてトイレマークを常時確認していました。

街の中を散策中に“緊急事態”が迫り、「トイレ」マークを見つけて入ろうとしたら、カウンターのお兄さんに呼び止められて“マネー”との声。“5 クローネ(約 75 円)”を払ってようやくスッキリ。しかし水洗だが洗浄ではありません。

ホテルも高級な部屋でしたがシャワーだけ(お風呂なし)、トイレは水洗だが洗浄はありません。備え付けの紙は障子紙と同質程度であり、トイレ文化の違いを思い知らされたものです。

③6 日間の出張でしたが帰宅直後に「まずお風呂、刺身とお新香に日本酒。そして洗浄トイレ。」これで日本人の暮らしに戻った(奥さんを含めて)と実感したものです。

終わり

